

ル大帝と號す。又從來回教徒を保護して、婆羅門教徒等を虐待したれども、帝に至りて、是等の弊を除き、兩教徒を平等に保護せしかば、國民みな悦服せり。されど、其の後、國勢次第に衰へ、内難外患頻りに至り、莫臥兒朝の命令は、諸州を服すること能はず、且つ歐洲諸國と交通開くに及び、遂に其の侵畧を蒙るに至れり。

(三) 葡萄牙人の來航。

印度にては、久しく西洋との交通を絶ちたりしが、西洋諸國にては、國土の開明と共に、遠洋航海を企て、殊に印度地方の、豐饒にして物産多きを知りて、便利なる航路を發見せむここに盡力せしに、遂に西洋紀元一千四百九十八年(我が紀元二一五八)に及びて、バスコ、デ、ガマといふ者、種々の困難を経て、亞非利加洲の南端、喜望峰を廻りて、印度に來航せり。バスコ、デ、ガマは、伊太利のゼノアの人にして、葡萄牙王の命を

西洋諸國の
遠洋航海

葡萄牙船の
來航

受けて、此の新航路を發見せしなり。こは莫臥兒朝以前なりき。此の後、葡萄牙船は、屢來航して、貿易を開き、又印度の西岸及マラカを取りて、益其の領地を廣め、暹羅にも貿易を開き、大に商權を振へり。

和蘭人の來
航

(四) 和蘭人の來航。

和蘭人の東洋に來航せしは、葡萄牙人より、凡そ一百年の後にして、西洋紀元一千五百九十六年(我が紀元二五二六)なり。爾來、大に奮ひて、葡萄牙の商權を奪ひ、又西班牙とも競争して、貿易を盛にし、和蘭東印度商社を建て、漸次葡萄牙人を逐ひ、マラカ、錫蘭等を領せり。

(五) 英吉利人の來航。

英吉利人の印度に來航せしは、西洋紀元一千五百九十一年(我が紀元二二五一)なりき。また、東印度商社を設けて、和蘭と競争し、互に激戦したることありしが、終に和蘭人大敗し、其の東印度商社も、遂に亡びて、商權英人に歸しぬ。

英吉利人の
來航

佛蘭西人の來航

(六)佛蘭西人の來航。佛蘭西人もまた印度に來航して、通商を開き、西洋紀元一千六百七十四年(我が紀元三三三)に、佛蘭西東印度商社を立て、英人と互に商權を争へり。時に莫臥兒朝分裂して、諸侯互に攻伐せしかば、佛人これに乗じて、侵略せむことし、遂に英人と戰端を開くに至れり。

(七)英人の侵略。佛將シブレイ、印度に至りて、漸く侵略せむことせしに、英人クライブ、東印度商社に在り、兵を率ゐてカルカッタを取り、屢佛軍を敗り、遂に悉く佛人の領地を占有せり。其の後、印度の諸侯、英人を驅逐せむこと欲し、屢兵を起し、かごもみなクライブに敗られ、クライブは、東印度商社よりベンガル州の總督に任せられ、印度の要地は、みな英人の手に歸しぬ。其の後、クライブは、英國に歸り、ヘスチングこれに代り、遂にベンガルを英領となし、オウド國を英人の保護國となし、尋いで

ヘスチング

莫臥兒朝の滅亡

ヘスチングは、大總督となりて、益々侵略を逞くせり。

(八)莫臥兒朝の滅亡。莫臥兒朝、漸く衰へ、ヘスチングの時より、年金を受けて自ら給せり。其の後、各地の諸侯、往々兵を起して、英領政府に反抗し、殊に西洋紀元一千八百五十七年(我が紀元一七二)には、土兵叛旗を擧げ、諸侯これを助け、莫臥兒帝を謀主となして、國運を恢復せむこと謀りしかごも、遂に利あらず。是に於て、英國政府は、全く莫臥兒朝を廢して、諸侯を罰し、又東印度商社を廢して、全印度を英國女皇の直轄とせり。時に西洋紀元一千八百五十八年(我が紀元一八一八)なり。爾來英國政府は、教育を奨め、商工を勵まし、鐵道、電信、郵便等の便を開き、印度の開化をして、駸々として進ましめつゝあり。

後印度諸國

(九)後印度諸國。後印度とは、印度の東方、支那の南方に在る一大半島の總稱にして、今は安南、暹羅、緬甸、馬來半島等の諸

國に分る。其の今日に至るまでには、幾多の變遷を経たるものなり。

安南

安南は、既に上古周の時に、支那に朝せり。其の後、或は獨立し、或は支那の郡治となりしが、明の成祖の時に至り、全く討滅せられて、其の治下に屬せり。尋いで黎利といふ者、明に反き、自立して皇帝と稱し、國號を大越といふ。實に明の宣宗の時にして、其の後、大越の國勢益強大に赴きぬ。されど、明の世宗の時に及びて、莫登庸といふ者、帝位を篡奪したりしが、黎氏再び國運を回復せり。其の後、また屢篡奪興亡あり。黎氏の臣阮福映といふ者、佛國の援助を得て、安南を一統し、國號を越南と改め、清帝(高宗の命によりて)越南國王に封ぜられぬ。こは即ち今の安南王の祖なり。

暹羅

暹羅は、隋の時に、始めて支那に通せりといふ。其の王朝には、屢

山田長政

變遷ありき。我が國の關ヶ原の戰及大阪の役後、亡命の徒、海外に航し、暹羅に居住せる者頗る多く、國王も亦これを優遇し、土地を貸與して居らしむ。日本街といふものは是れなり。時に山田長政も暹羅に至りしに、會逸比留國に亂あり。長政、暹羅國王の依囑により、居留の日本人を率ゐて、これを平げ、其の他にも、屢戰功を立て、大に國王の信任を得て、暹羅の國政に與りしが、奸臣に忌まれて毒殺せらる。其の後、暹羅の國運、更に消長あり。今代に至りて、次第に歐米の開化を輸入し、教育を盛にし、政治を改め、軍備を整へ、諸外國と條約を結びて修交せり。

緬甸

緬甸は、宋の時に、始めて支那に通せり。其の後、元の世祖これを招きたれども、聽かざりければ、兵を遣して國都を陷れぬ。爾來、支那に服屬せり。明末に至り、内亂によりて、國內分裂し、阿瓦、阿腦、干毘牛の三國に分れ、屢相攻伐せしが、終に阿瓦の勢強大に

赴きて、他の三國を併呑せり。
 英人の印度を占領するに及び、遂に緬甸に侵入し、國都阿瓦を衝かむこせり。緬甸王、和議を乞ひ、償金を出し、土地を割けり。是れより國勢大に衰頽せしが、西洋紀元一千八百五十二年(我が元一二五)に至り、再び英人と戦ひ、毎戦利あらず、また土地を割きて、和をなせり。更に一千八百八十五年(我が元二五四五)に及び、また英人と戦ひて、大に敗れ、王は擒にせられ、緬甸の全地、みな英國の領地となれり。實に我が明治十八年なりき。

第六編 清の一統より現時に至る

第一章 清初の治亂

清の一統

(一) 清の一統。蒙古族の元朝衰へて、漢族の明朝また支那の主權を執りしかども、明朝衰亡するに及び、滿州族の清朝起りて、支那を一統せり。滿州はもと女眞の地なり。太祖奴兒哈赤基業を創め、太宗皇太極嗣ぎ立ちて、國號を大清と改め、次第に明の境内に侵入し、世祖福臨に至りて、遂に天下を一統せり。

三藩の亂

(二) 三藩の亂。世祖崩じて、聖祖位に即く。年號を康熙と改めしゆゑ、また康熙皇帝とも稱す。時に明の遺臣等、大抵平定に歸し、鄭氏の族のみ、臺灣に據りしが、尋いで又三藩の亂起れり。是れより先明の降將、吳三桂、尚可喜、耿精忠等、大功ありしかば、吳三桂を雲南に封じて平西王とし、尚可喜を廣東に封じて平南王とし、耿精忠を福建に封じて靖南王とす。當時、これを三藩

と稱せり。三藩みな大兵を擁して、勢力盛なりき。朝廷にては、かく藩鎮の大兵を擁して、地方に雄據するは、國家に不利ならむを恐れければ、尙可喜の老病の爲に、藩を撤せむことを請ふに及びて、朝廷直にこれを許せり。吳三桂等も、自ら安んぜず、心ならずもまた撤藩を請へり。朝廷またこれを許し、かば、三桂大に悔悟し、遂に兵を擧げて背き、雲南貴州四川湖南等の諸省を略して、その勢甚だ猖獗なりき。

三桂叛くに及び、舉朝大に驚き、急に尙可喜耿精忠の藩を復し、諸將を遣して、賊を討たしめしに、耿精忠も反きて、廣西福建の二省を略し、又陝西の王輔臣も反きて、共に三桂に應ぜり。尋いで尙可喜の子之信、三桂に通じ、其の勢益盛なりき。されど、王輔臣耿精忠尙之信等遂に降りしかば、賊勢漸く衰へ、三桂も病死せり。餘賊なほ、三桂の子世璠を擁したれども、賊兵大敗して、世

鄭成功

璠自殺し、諸省みな平定せり。

(三) 臺灣の平定。明末に當り、鄭成功義兵を擧げ、魯王を奉ぜしかども、終に志を得ずして臺灣に卒せり。然るに、其の子孫なほ遺志を繼ぎて臺灣に據りぬ。成功の父芝龍曾て日本の長崎に來りて女を娶る。成功は其の子なり。成功の子、經、臺灣に在りて、明の正朔を奉ぜり。三藩の亂起るに及び、屢福建廣東等の沿岸を侵略す。經死し、次子克塽尙幼弱なりしかば、清の大軍來り討つに及び、克塽出で降り、臺灣全く平定せり。

(四) 制度。清の諸制度は、明と甚しき差違なし。されど、中國には漢人種甚だ多きを以て、清は官吏に滿漢兩人種を用ふ。又清は國家の形勢、全く一變し、廣く歐米各國と交通するに至れるを以て、次第にこれに應ずる改革を行へり。今左に其の制度を略述すべし。

臺灣平定
制度

官制

(一)官制 内閣は政府の中心にして、大學士と協辦大學士とを以て組織す。大學士は即ち宰相なり。内閣の下に、吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部の六部ありて、諸務を分掌す。其の長官を尙書といひ、次官を侍郎といふ。又別に軍機處あり、皇帝の直轄にして、軍國の大事を議する處なり。總理衙門ありて、外交の事を總理し、理藩院ありて、蒙古、回疆、西藏等の藩政を掌る。

地方を省、府、州、縣に分ち、省には總督を置き、一省專任のもの、二三省兼任のものあり。又一省に一人の巡撫を置く。府、州、縣には、知府、知州、知縣ありて、省の總督に屬す。

兵制

(二)兵制 陸軍には八旗、綠旗、鄉勇の三兵あり。八旗兵は滿州より起るに、其の制あり、軍旗の色に黃、白、紅、藍の別ありて、各色に正鑲あるものなり。後には滿州八旗、蒙古八旗、漢軍八旗の別あり。綠旗兵は、綠旗を以て號とし、漢人を以て編制し、

税制

各省に駐防す。鄉勇とは、長髮賊の時に招募せし兵にして、大功を奏したりしかば、爾後、各省にこれを置けり。陸軍の外に、水師あり。近年、西洋諸國と戰を交ふるに及び、大に進歩せり。これを北洋、南洋、福建、廣東、長江の五水師に分ち、北洋水師最も強盛なりしが、日清戦争の時、全滅せり。

(三)税制

田に租あり、夏税、秋糧の二あり。夏税は、麥を主とし、秋糧は、米を主とす。又丁税と稱するものありて、成丁、未成丁、貧戸、富戸の別によりて課す。其の他、諸種の雜税あり。

(五)學藝

清に至りて、大に考證學起れり。又聖祖は、聰明にして學を好み、鴻儒碩學を集め、佩文韻府、淵鑑類函、康熙字典等の大編述をなさしめたり。考證學にては、顧炎武これを稱へて、著書多く、考證甚だ精確なり。閻若璩、毛奇齡、惠棟、戴震等、これに

聖祖の大編述

文學

次ぎて輩出せり。文學も大に發達せり、清初に魏禧（字は叔子）侯方域（字は朝宗）汪琬（字は茗文）朱彝尊（字は竹垞）等ありて、文章を能くし、吳偉業（字は梅村）蔣士銓（字は藏園）趙執信（字は仲符）等は詩を能くし、爾來詩文の名家輩出し、又小説、戯曲等にも名家多し。

喇嘛教

（六）宗教。清には喇嘛教流行す。喇嘛教には、紅教と黃教との別あり、衣服の色によりて、名を異にせるなり。紅教は、元の時に始まり、黃教は、明の時に始まりぬ。清代に至り、蒙古、西藏地方には、黃教最も盛に行はれぬ。道教も、各地に行はる。されど、中流以上には、儒教能く行はれて、道德の標準とせらる。

儒教

耶蘇教は、元明以來、次第に弘まり、歐米と交通せしより、各地に教會を設け、宣教師の渡來する者多くして、各地に布教せらる。回教は、支那の西北部に行はれ、次第に東漸するが如し。

回教

第二章 清朝の外征及び内亂

外蒙古征服

（一）外蒙古征服。是れより先、蒙古及び其の西方に、蒙古種族多し。準噶爾部の酋長噶爾丹といふ者、大に勢力を得て、近隣の部族を併呑し、回部を撃ち、又外蒙古の土謝圖汗及車臣汗、札薩克圖汗を驅逐せり。三汗、東に走り、清廷に來りて、援を乞へり。時に聖祖は、三藩の亂を平げ、又臺灣の鄭氏をも降したる後なりしかば、聖祖諸軍を率ゐて、噶爾丹を親征し、大にこれを敗れり。噶爾丹、終に窮迫して自殺し、阿爾泰山より東は、悉く清の版圖に入りぬ。

西藏征服

（二）西藏征服。初め、噶爾丹の兄の子に、策妄拉布坦といふ者あり。伊犁を畧し、又近隣の諸部を併せ、自立して、準噶爾汗と稱し、兵を遣して、西藏に入り、其の酋長拉藏汗を襲ひて、これを

殺し、に、聖祖兵を遣してこれを伐たしめ、悉く西藏を平定し、前藏後藏に、各守將を置き、て鎮せしめぬ。既にして臺灣の朱一貴といふ者亂を作し、自ら中興王と稱し、勢頗る盛なりしが、施世驄等これを討平せり。尋いで聖祖崩じ、世宗位に即く。

準噶爾征服

(三) 準噶爾征服。西藏は、既に清に征服せられぬ。而して青海の諸部、未だ服従せず、清軍これを討平す。時に伊犁の策妄拉布坦死し、其の子策零嗣ぎて、屢邊境に侵寇せり。世祖乃ち兵を遣して、これを伐たしめ、終に大に之を破れり。世宗崩じ、高宗の世に及び、伊犁大に亂れしかば、高宗兵を遣して、これを伐たしめ、準噶爾悉く平定せり。

回部征服

(四) 回部征服。喀什噶爾は、天山南路の地にして、其の土人回教を奉ずるを以て、回部又は回疆と稱す。其の酋長に、二子あ

緬甸

り、長を博羅尼特といひ、次を霍集占といふ。準噶爾に併吞せられしを、清軍の準噶爾を征するに及び、其の力に由りて、故地を回復せり。然るに、其の後、伊犁に通じて、清軍に抗し、又庫車地方に據りて、清に背けり。高宗、乃ち兵を遣して、これを伐たしめしに、二人大に敗れて、西に走り、終に土酋に殺され、回部悉く平定せり。既にして、回部の烏什亂れしが、幾ばくならずして平げり。

(五) 西南の征服。西域の諸國は、既に平定せり。更に西南の緬甸を征せり。緬甸の雍籍牙といふ者、王位を篡ひ、又屢清の邊境に侵入せり。由りて、明瑞等を遣して、これを討たしめ、たれども、明瑞深く進みて、糧盡き、遂に戦死せり。後、更に傅恒を遣して、緬甸を討たしむ。傅恒大に敵軍を破りしかば、緬甸和を乞ひて、事平ぎぬ。

金川

尋いで金川の役起れり。金川とは、金沙江の上流に在りて、緬甸

山東
循化
臺灣
安南
廓爾喀

内亂

康熙乾隆の治

教匪の亂

の北東方に位し、地形險要にして、大金川、小金川に分る。前後三回背きたれども、討ちてこれを平定せり。時に山東には王倫といふ者、邪教を以て衆を惑はし、循化には回教徒馬明心といふ者、亂を作し、又臺灣にては林爽文といふ者、兵を起したれども、みな幾ばくならずして平定せり。尋いで兵を南に出して、安南を伐ち、又西方の廓爾喀(西藏の西に在り)を伐ちて、これを降服せしめぬ。

(六)内亂

聖祖より、世宗、高宗の三世間、明君相繼ぎ、外は武威を四方に輝かし、内は制度文物を修めて、粲然として觀るべく、農工商の業も、また隆盛に赴き、實に清代の極盛期と稱すべし。年號によりて康熙、乾隆の治といふ。されど、高宗崩じ、仁宗立つに及びて、内亂起り、次ぎに外患續發し、國運次第に衰へぬ。初め、高宗の末年に、白蓮教徒、四川、陝西、湖北の人民を誘惑して

不軌を謀りたれども、捕へられしに、仁宗の時に及び、再び起りて、無賴の徒これに應じ、湖北、河南、陝西、四川、甘肅等、大に亂れ、賊勢猖獗にして、官軍大に苦みたれども、七年を費して、終にこれを鎮定せり。

海賊の亂

是の時、海賊蔡牽、朱潰の徒、浙江、臺灣等の沿岸に出沒して、勢頗る猖獗なりしかども、終に官軍に破られて、安南に走りしかば、亂尋いで平ぎぬ。

回部の亂

仁宗崩じて、宣宗の世に及び、回部に大亂起り、諸部大に亂れしが、官軍これを伐ちて、喀什噶爾、葉爾羌等を取り、回部を平定せり。

第三章 西部亞細亞の形勢

波斯

(一) 波斯。 明の初世に當り、彼の有名なる帖木兒は、支那の西疆より地中海に達するまでの、廣大なる領土を包有したれども、其の死後、版圖五解し、其の後、ウスベールといふ者、波斯に起りて、次第に東侵せり。尋いで其の地、分裂せしが、イスメールこれを一統せり。後凡そ二百年を経て、マームード王、阿富汗斯坦に起るに及び、東西を攻伐し、東は印度に入りて、ベンジャブの地を略し、西は波斯に入りて、これを征服し、自ら波斯の「シャ」位に上れり。時に西洋紀元一千七百二十二年(我が紀元二三八三)なり。シャ「」は國王のこごなり。

マームードの後、アスラフを経て、ナザル「シャ」に至り、大に威を四方に張りしかども、ナザル卒して、王位を争ふ者、四方に起り、阿富汗斯坦、皮路直斯坦は、波斯を離れて獨立せり。(西洋紀元一七四一)かくて波斯は、諸種の變遷を経たりしが、アガ、モハメットは、今代

の波斯王統の始祖となれり。其の後、波斯の國運、次第に衰頽に赴き、加ふるに、英領と露國との間に介立して、兩強國の爲に壓せられしかば、方今は、裏海海上の海軍權も、既に露國に占領せられぬ。

阿富汗斯坦

(二) 阿富汗斯坦。

阿富汗斯坦は、ナシル「シャ」の死後、ドス

ト、モハメットといふ者、王位を篡奪せり。廢王は、印度に逃れて英人に投ぜり。時に露西亞、次第に南侵せしかば、英人は、阿富汗人に結びて、これを防遮せむと欲し、廢王を擁して、復位せしめ、兵を以て、阿富汗斯坦に入れり。かくて英人は、必ず阿富汗人の歡心を得るならむと期せしに、事全く豫想に反し、阿富汗人は、ドスト、モハメットの子アクバーを奉じて、兵を起し、英人を擊退せり。其の後屢、阿富汗斯坦に兵亂起り、或は英人と和し、或は英人に背き、露國も亦南侵を圖りて、英國と相睥睨の形なりしが、終

に西洋紀元一千八百八十五年(我が明治十八年)に至り、露英互に協議して、阿富汗斯坦の北境を定め、是れより争亂絶えけれども、阿富汗斯坦の國力は、十分の獨立にあらずして、英露の保護を受け居るなり。

露西亞の南

(三)露西亞の南侵。露西亞は、久しく蒙古に苦められしが、其の後國勢振起し、殊に有名なる彼得大帝の出でしより、國勢大に一變し、内は政治を整へ、外は四方を侵畧し、南は高加索地方より黒海海上の權をも占め、裏海より支那の西疆に達し、中央亞細亞の地を侵畧し、北部亞細亞を侵畧し、屢支那と衝突を惹き起したりしが、終に東方海岸に達し、また朝鮮近隣の地方までを侵畧せり。支那と衝突のことは、なほ下章に述べべし。

第四章 清國と諸外國との關係

鴉片戰爭

(一)鴉片戰爭。英人は、既に印度に來りて、通商を開き、東印度商社を設立せしが、遂に支那にも來れり。爾來、東印度商社は、英國政府の特許を受けて、次第に鴉片を支那に輸入せり。清初には、輸入未だ多からざりしが、高宗仁宗より、宣宗に至りては、益盛にして、害毒も從ひて甚しかりしかば、清廷これを禁じたれども功なかりき。

宣宗の時に、林則徐を廣東總督に任じ、鴉片輸入禁止の事を謀らしむ。林則徐、廣東に至り、英商に命じて、其の蓄ふる所の鴉片を悉く出さしめて、これを燒棄し、且つ互市を禁ず。是に於て、英人軍艦を率ゐて來り、互市を復せむことを求めけれども、林則徐聽かざりしかば、清船三艘を擊破して走れり。林則徐、英人の再來を慮りて、兵備を修めしに、英艦十餘艘來り

て、廣東香港舟山乍浦寧波等を攻撃せり。既にして、和を議せしかども調はず。英人更に兵を進めしかば、清廷大臣を南京に遣し、英將に會見して、和を議せしめ、終に清國より償金二千六百萬兩を出し、香港を割與し、廣州福州寧波廈門上海の五港を開きて、互市場とせり。時に西洋紀元一千八百四十二年(我が紀元二)なり。

長髮賊の亂

(二)長髮賊の亂。鴉片戦争の後、廣東廣西の地方に、盜賊蜂起し、且つ凶作打續きしゆゑ、人民大に困窮せり。然るに此の地方は、西洋人の夙に貿易せし所なるを以て、耶蘇教の信者多かりき。時に洪秀全といふ者、耶蘇教を以て、人民を誘惑し、兵を起して、諸方を抄掠す。其の徒みな髮を蓄へしを以て、世にこれを長髮賊といふ。

宣宗崩じて、文宗立ち、林則徐等を遣して、賊を討たしめければ

曾國藩

も、賊勢益盛にして、洪秀全は自ら天王と稱し、國を太平天國と號し、其の部下の諸將を王に封ぜり。秀全遂に進みて、南京を陥れ、勢に乗じて、北京に迫らむとして果さず。南京に據りて、清の政令を改め、其の制度、多く耶蘇の教旨に従へり。官軍の賊を討ちし者多く功を奏せざりしが、曾國藩といふ者文武に通じ、郷勇を募りて、隊伍を整へ、頻に賊軍を破れり。されど、賊軍毫も衰へず。江西湖南安徽河南等、みな其の有に歸し、餘毒、山西直隸に及べり。既にして曾國藩屢賊を破り、曾國荃(國藩の弟)左宗棠李鴻章等も、賊を討ちて、各地を復せしかば、賊勢漸次に退蹙せり。

英米佛の援

文宗崩じ、穆宗位に即く。時に賊兵、上海に迫りて、頗る猖獗なりしかば、官軍力を合せ、且つ英米佛の援兵を得て、賊兵を防ぎ、殊に米の華爾特英の戈登等、大に勇戦せり。是に於て、官軍大に振

英佛聯合軍の來侵

ひ、頻に賊軍を敗り、曾國藩諸軍を合して、賊を南京に圍む。城中食盡き、秀全自殺し、餘黨尋いで平く、秀全の兵を起し、より十五年にして、其の禍十六省に及びしが、曾國藩等の力に由りて、纔にこれを平定することを得たり。(我が紀元二五二二)

(三) 英佛聯合軍の來侵。 内に、長髮賊の盛なりしとき、また外に、外國と難を構へぬ。當時、英人の支那沿海に貿易を營める者の中に、支那船を借り、自國の國旗を掲げて、廣東に来るものありて、其の中に、支那人ありしかば、清國の官吏その船中に入りて、清人十二名を捕へ去れり。こは條約に背きし所爲なりければ、英國の領事、パークスは、大にその不當を責め、兩廣總督に、十二名を船中に送り還さむことを求めしに、總督其の言の如くせざりしかば、英人大に怒りて、諸砦を砲撃し、遂に廣東の市街を焼けり。是に於て、清廷和を請ひ、償金四百萬兩を拂はむ

ことを約し、天津にて條約を結べり。

かくて、英國の使臣は、條約の交換を爲さむが爲に、北京に赴かむとし、白河の河口に至りしに、兩岸の砲臺より、不意に激烈なる砲撃を爲して、上ること能はず。此の時、佛國の使臣も難に遇へり。是に於て、英佛の二國、同盟して軍艦を發し、進みて直隸灣に入り、太沽を陥れ、天津を取り、北京に迫れり。清帝、北京を出奔し、皇弟恭親王をして、和議を求めしむ。露人其の間に立ちて、調停を試み、遂に一千八百萬兩の償金を出し、從來の開港場の外に、牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢口等の諸港を開かむと約し、和議成る。時に西洋紀元一千八百五十九年(我が紀元二五一九)なり。

(四) 臺灣事件。 清國は、外交を開きしより、屢、外兵を蒙りし爲、自國の外は、みな夷狄禽獸なりと思ひし尊大の氣も、頗る挫折し、次第に内政を整へ、外交に注意せり。長髮賊の平きしより

臺灣

數年を経て、日本と好を通じ、通商を開けり。時に、臺灣の生蕃日本の民漂を虐殺しければ、日本は、使を清國に派して、蕃人の罪を糾さむことを求む。然るに、清廷にては、臺灣の生蕃を化外の民として、其の行爲は清廷の知らざる所なりと對へしかば、日本は、陸軍中將西郷從道等をして、軍艦を率ゐて、臺灣を伐たしむ。生蕃力盡きて降を乞ふに至りしかば、清廷大に驚き、速に兵を撤せむことを日本に求めけれども、日本應ぜず。全權辦理大臣大久保利通を遣して、臺灣の事を論議せしむ。辯論數回にして、清廷は、言を左右にせしかば、利通憤然として、將に曲直を兵力に訴へむとせしかば、英國公使ウエード、兩國の間を調停して、和議をなし、清廷より、撫恤銀十萬兩、軍費四十萬兩を日本に償へり。時に我が紀元二千五百三十四年（西洋紀元一八七四）にして、即ち明治七年なり。

安南事件

(五) 安南事件。臺灣事件の年に、穆宗崩じて嗣なかりしかば、醇親王の子載湉立つ。是れ即ち今帝なり。

安南の王位には、屢篡奪ありしが、終に阮福映といふ者、國內を一統し、清の高宗の命によりて、王に封ぜられ、其の子孫、世々君臨せり。阮氏の安南を定めし頃、佛人來りて貿易せしが、終に佛人に、西貢を與へ、又東京を経て、直に雲南地方に至ることを許せり。然るに、其の後、安南王は、その約に背き、なほ耶蘇教徒を虐待せしかば、佛國政府、これを責め、兵を遣して安南を伐たしめぬ。

時に長髮賊の殘將劉永福、安南に在り、安南王を助け、其の部下を率ゐて、佛軍を敗れり。劉永福、黒旗を用ひしかば、黒旗軍の稱あり。然るに、佛將クールベ、また能く戦ひ、黒旗兵を破りて、京城を陥れしかば、安南王終に東京を佛に割讓して和を結へり。

清佛戰爭

(六) 清佛戰爭。右の和約を結びしより、安南は佛國の保護國となりしかども、安南人は佛國の干涉を受くることを欲せず。また從來清國に對して、外藩の禮を執りしかば、清國もこれを傍觀せず。佛國の安南に對する處置を不當となし、曾紀澤を遣して佛國を詰らしめしかども、佛國聽かず。遂に條約を結びて、清國は安南を放棄し、佛國の安南に對する保護權を承認せり。

然るに、佛軍の諒山鎮に赴きしとき、清國の守兵不意に砲撃せしかば、清佛の平和忽ち破れて、互に戰爭を交へ、クーペー大に勇戦せしが、病みて歿し、尋いで佛國の内閣交迭して、平和論となりしかば、未だ勝敗を決するに至らずして、講和の約整ひたれども、安南の主權は、遂に佛國に歸せり。時に、西洋紀元一千八百八十五年(我が紀元二五四五)にして、我が明治十八年なり。

露國との關係

(七) 露國との關係。

亞細亞洲の北方一帶の廣原を西比

ネルチンスクの條約

利亞といふ、ユサツク人、エルマーク始めて此の地方を略して、露國に獻せり。時に、明の世なり。其の後、露人は次第に東侵したれども、支那にては、深く意こせざりしが、聖祖の時、城を築きて、其の南侵を禦げり。是れより、清露互に兵を交へたれども、幾ばくならずして、和約を爲し、境界を定め、露國は、黒龍江を下らざることを約せり、これをネルチンスクの條約といふ。

其の後、清廷は、内外の關係繁きが爲、深く意を北方に注がざりしかば、露國は、これに乗じて、ネルチンスクの條約を冒し、益、南東を侵畧して、黒龍江口地方をも蠶食して、殖民地となし、且つ、ニコライブスク港を開き、遂に樺太にまで侵畧を及ぼせり。故に清國を改めて愛琿條約を結べり。此の時、清國にては、内に長髮賊の亂あり、外に英佛と事ありて、内外甚だ多事の際なりけり。

愛琿條約

魯國の東侵

れば、一も二もなく、露國の議に従ひ、悉く黒龍江北の地を失へり。尋いで英佛聯合軍の進撃に遇ひ、清國は北京城下の盟をなし、時露國は和議の調停に盡力し、其の報酬として滿州の東岸、即ち烏蘇里江以東の地、凡そ六百里を取れり。今は頗る盛大になれる浦鹽斯德港は、此の後に開きたるなり。斯く滿州の地を得しより、朝鮮と互に境界を接するに至れり。爾來露西亞は、益、其の羽翼を東洋に張らむとするの勢あり。

伊犁事件

東北なる清露の關係は、右に述べしが如し。而して西北にては、また伊犁事件起れり。初め、長髮賊の亂に乗じて、西域の回教徒兵亂を起し、喀什噶爾地方、大に亂れし時に當り、露國は、中央亞細亞を侵略せしかば、此の亂に乗じて、伊犁地方をも占領せり。清廷左宗棠を遣して、諸方を征服し、伊犁の返還を露國に求め、崇厚を全權大臣として露京に遣し、これを商議せしむ。然るに

其の條約中、清國より、土地を露國に割讓することありしゆゑ、清廷にては、群議百出し、崇厚を獄に下し、條約の廢棄を主張せしかば、西國互に開戦の準備をなせり。已にして曾紀澤を露國に遣し、新條約を結ばしめ、清國より償金九百萬、ループルを出し、伊犁を取り還して、平和の局を結べり。時に西洋紀元一千八百八十一年(我が紀元二五四一)にして、我が明治十四年なり。

朝鮮の國勢

第五章 朝鮮の獨立及日清戰爭

一朝鮮の國勢。李成桂朝鮮を立てしより、倭寇に苦められ、又豊臣秀吉に全國を蹂躪せられしかば、國勢大に衰ふ。清起るに及びて、又其の兵を蒙り、國王李倬、江華島に遁れて、和を軍門に乞へり。是れより朝鮮は、永く清に朝貢を獻じ、國王の嗣立

朝鮮と佛米との葛藤

には、清の册命を受け、又毎歲、聘使を發す。これを、冬至使といふ。されば、朝鮮は、全く清の屬邦の如くなりき。然るに、其の後、佛米と葛藤を生じ、又日本とも紛議を生ぜしかども、日本は勉めてこれを扶助し、終に朝鮮をして能く獨立國ならしめぬ。

(二) 朝鮮と佛米との葛藤。近年に及び、佛國の宣教師、朝鮮に入りて、耶蘇教を傳へ、盛に其の教を弘む。然るに朝鮮にては、鎖國攘夷の説盛にして、耶蘇教の徒を憎み、佛國の宣教師以下信徒數十名を殺せり。是に於て佛艦數艘江華島を砲撃せり。時に西洋紀元一千八百六十六年(我が紀元二五二六)なり。

尋いで米國船來りて、通商を求めしに、朝鮮人又これを襲ひて、米人數名を殺傷せしかば、米國政府、其の不法を怒り、これを清廷に談判せしに、清廷答へて、朝鮮の内治外交は、清廷の知るに非ずといふ。米國政府、乃ち軍艦を發して江華島の砲臺

朝鮮と米國との葛藤

朝鮮と日本との紛議

を撃破せり。

(三) 朝鮮と日本との紛議。曾て、我が豊臣秀吉の朝鮮を征せしより、朝鮮は、我が國を仇視する風ありしが、徳川家康豊臣氏に代りて、天下を一統するに及び、更に使を朝鮮に遣して、互に結び、使聘の往來も絶えざりき。然るに、我が國、明治維新の後、百度改新に赴き、且つ盛に西洋諸國と交通を開き、また朝鮮にも使を遣して、好を修めむとせしに、當時、朝鮮にては、鎖港説を守りて、日本の廣く西洋諸國と開港通商せるを見て、日本の國情を疑ひ、且つ徳川將軍の書辭には、日本國大君とありしを、此の度は大日本天皇などの文字ありしかば、大に先例と違へるを怪み、我が國との修好を拒絶し、頗る無禮の舉動なごありき。されば日本にては、征韓論を唱ふる者ありしが、政府は勉めて朝鮮を誘導せむここに力を用ひ、再三修好を求めたれども

朝鮮、鎖説を守る

明治八年の變

朝鮮は、遂にこれに應ぜざりき。

我が明治八年、(我が紀元二五三五)に至り帝國軍艦雲揚號朝鮮の近海を過ぎて、江華嶋に至りしに、朝鮮の守兵、故なく不意に砲撃せり。我が兵、其の無禮を憤り、應戦して、其の砲臺を毀ち、歸りて事由を政府に報ぜり。乃ち翌年一月、日本より黒田清隆等を朝鮮に遣して、これを詰問せしめしに、朝鮮その罪を謝せしかば、これを許し、港を開かしめ、修交條約を結べり。是れ實に朝鮮開港の初なり。爾後、歐米諸國、續々として朝鮮に來り、通商を爲すに至りしが、みな朝鮮を支那の屬國の如く見倣せるに、獨り我が國は、朝鮮を獨立國と認めたりしは、後日、世界諸國の等しく朝鮮を獨立國と認むるに至れる基なり。

明治十五年の變

是れより、朝鮮は、次第に國政を改革せしが、國王の生父大院君と、外戚閔氏と、其の意見常に相合はざりき。終に我が明治十五

朝鮮の開港

朝鮮の二黨派

年(我が紀元二五四三)に至り、大院君は京城の鎮兵を煽動して、閔氏の第を襲はしめ、又王宮に亂入せしめぬ。暴徒等は、日本公使館をも襲撃せしかば、公使花房義質等、纒に逃れて、長崎に達せり。日本政府兵を發し、公使を護衛して朝鮮に赴かしむ。朝鮮罪を謝し、償金五十五萬圓を出して事平く。是より、我が國にては、兵を朝鮮の京城に置きて護衛せしむ。支那にても、また兵を朝鮮に駐せしめ、又此の時、大院君を其の國に押送せり。此の頃、朝鮮は二黨あり。獨立黨と事大黨と。是れなり。事大黨とは、大國に従屬する義にして、専ら支那に臣事せむとするなり。獨立黨とは、これに反して、支那の羈絆を脱し、日本に依頼して朝鮮の獨立を企圖するものなり。兩黨互に水火の如く、軋轢せしが、事大黨は、清國の將袁世凱と結託して、勢力を占むるに至りしかば、獨立黨の首領金玉均、朴泳孝等、憤慨に堪へず、密に相

明治十七年
の變

謀りて事を起さむと欲し、我が明治十七年、(我が紀元二五四年) 俄に起りて、事大黨の首領閔臺鎬等を襲撃し、閔泳翊等を傷つけ、國王を擁して、太政一新の號令を下せり。又國王は、手書を致して、我が公使に、王宮の護衛を請ひしかば、公使竹添進一郎、兵を率ゐて王宮に赴く。此の時、事大黨は清國公使袁世凱に依り、力を協せて、王宮を圍み、國王を清軍に擁せり。竹添公使、乃ち兵を收めて退き、我が公使館は、亂民に焼かれぬ。此に於て、新政府忽ち仆れ、金玉均、朴泳孝は、日本に逃れ、閔氏の族政權を専らにするに至れり。日本政府、井上馨を朝鮮に遣して、其の罪を問はしめしかば、朝鮮は、謝罪金を出して、平和の局を結びしが、此の變事に當り、清兵は、大に暴虐を極めしゆゑ、日本は、更に伊藤博文を清國に遣して、事を議せしめ、其の議定によりて、爾後、日清兩國、互に朝鮮駐在の兵を撤し、若し出兵の必要あらば、相通告

天津條約

日清戰爭

すべきこと等を約せり。これを天津條約といふ。

東學黨蜂起

(四) 日清戰爭。右の變亂後、朝鮮の政權は、事大黨の掌中に歸せり。然るに、閔泳駿等は、國運を顧みず、一に清國に依頼し、其の公使袁世凱に願使せり。且つ閔氏は、貪慾にして、不法のことが多かりければ、人民に怨望する者頗る多く、我が明治二十七年、(我が紀元二五四年) 東學黨蜂起して、其の勢甚だ猖獗なり。朝鮮政府、これを鎮撫すること能はず。閔泳駿、乃ち援を清國に乞ふ。清國、此の機に乗じて、朝鮮を屬國にせむとする念あり。同年六月、亂民鎮撫を名として、兵を朝鮮に出し、其の舉動、全く天津條約に背きたるものなりしかば、日本にても、速に兵を朝鮮に出し、公使館及居留民の保護に充てたり。東學黨は、日清兩國の出兵を聞きて、四方に散じぬ。

日清兩國、朝鮮に對す

斯くて日本の公使大鳥圭介は、朝鮮王に勸めて、弊政を改革せ

る意見を異にす

開戦宣布

豊島沖の戦

成歡及び牙山の戦

しむ。然るに清國は、朝鮮を屬邦にせむ野心ありければ、我が大鳥公使の意見を異にせしのみならず、日本の撤兵を求めたれども、日本は、素よりこれに従ふべき理由なく、益朝鮮を啓誘して、弊政を改革せしめ、獨立國の實を擧げしめむことに盡力せり。時に清國にては、益兵を朝鮮に送りて、牙山に屯せしむ。會清艦三隻、豊島沖にて、日本の軍艦に會ひて、相當の禮をなさざるのみならず、急に砲撃を加へしかば、日本の軍艦、これに應戦して、その一を捕へ、その一を撃沈せり。これを日清海戦の初とす。時に七月二十五日なり。二十八日に及び、陸上にては、成歡の戦あり。是れまた清軍より不條理の攻撃をなし、ものにて、日本兵、全勝を占め、進みて、牙山城を陥れぬ。尋いで八月一日兩國共に開戦を宣布せり。

是の時に當り、朝鮮にては、日本の勸告に従ひ、次第に弊政改革

平壤の戦

海洋島附近の戦

金州旅順等陥る

に着手せり。初め、清國にては、兵を分ちて二となし。一は、陸路より進みて、平壤に據り、一は、海路より進みて、牙山に據り、南北より日本の軍を夾撃せむとせり。然るに、日本の配兵、甚だよろしきを得たるのみならず、豊島沖の海戦以來、牙山孤立となりて、大敗を蒙り、當初の計畫、全く畫餅に屬せしかば、専ら平壤を守れり。清兵、平壤の天險に據りて、壘柵を構へ、防守甚だ嚴なり。日本の陸軍中將野津道貫兵を部署し、諸方より包圍して、遂にこれを陥る。清兵潰走して、死傷算なかりき。尋で海軍も亦海洋島附近にて、大快戦を試み、清國の戦艦數隻撃沈せられ、黃海海上の權全く日本に歸しぬ。

日本の第一軍は、既に平壤を陥れ、進みて、清國の境内に入り、更に諸城を陥れて前進せり。又第二軍は、花園河口より上陸し、金州城を陥れ、又最も堅牢なりと稱せられし旅順の砲臺を陥れ、

威海衛陥る
北洋艦隊全滅

清國降を乞ふ

媾和條約の要件

下ノ關係約

遂に第一軍と連絡を通ぜり。又日本の別軍は山東省に上陸し、海軍もまた進みて威海衛に向ひ、清國の艦隊を撃ち、或はこれを撃沈し、或はこれを捕獲せり。清將丁汝昌降を乞ひて自殺し、清國の大に憑みさせし旅順も威海衛も全く陥り、北洋艦隊もた全く滅亡せしかば、日本の軍は、將に陸海力を合せて、直隸省に突入せむとす。時に日本の別軍は、また澎湖嶋をも占領せり。此に於て、清國は防禦の力盡き、李鴻章を全權大臣とし、日本に遣して、和を請はしめぬ。日本は、伊藤博文陸奥宗光を全權大臣とし、下、關に會して、商議せしめ、辯論數回を重ねて、媾和條約を締結し、清國より遼東半嶋并に臺灣嶋及澎湖列嶋を日本に割與し、從來の開港場の外に、四港を開き、且つ償金二億兩を出し、其の外、朝鮮の獨立を確認すること等を約して、平和の局を結べり。これを下、關係約といふ。時に我が明治二十八年（我が紀元二五五五）

遼東半島還附

支那の光緒廿一年四月なり。下、關係約既に訂結せられしが、露西亞佛蘭西獨逸の三國同盟を結び、日本が遼東半嶋を永久に領有せむは、東洋將來の平和に害あれば、宜しくこれを清國に還附すべしと勸告せしかば、日本は、これを容れて、遼東半嶋を清國に還附せり。清國これを謝し、更に償金三千萬兩を出せり。

清の帝系表

- (一) 太祖愛親覺羅奴兒哈赤 十一年
- (二) 太宗皇太極 七十年
- (三) 世祖福臨 十八年
- (四) 聖祖玄燁 六十二年
- (五) 世宗胤禛 十三年
- (六) 高宗弘曆 六十年
- (七) 仁宗永琰 二十五年
- (八) 宣宗綿寧 三十年
- (九) 文宗奕訢 十一年
- (一〇) 穆宗載淳 十三年
- 醇親王奕環
- (二) 今帝載灃

第六章 結論

結論
東洋史の中心は支那なり

以上六編と數十の章と項とを重ねて、東洋の史乘を叙述せり。東洋諸國の中、殊に支那、朝鮮、及びわが國の如きは、太古より互に相往來せし形跡あり。従ひて其の人情、風俗、政治、文藝等の互に關係せしこと尠ならず。且つ其の本來の人種も、共に蒙古種に屬すれば、諸種のごとに類似の點多きは、深く怪むに足らざるなり。而して其の發達は、上古に在りては、支那を中心とせしこと決して争ふべからざるなり。西域諸國及印度諸國に在りては、支那と頗る其の太古の發達を異にせるが如し。雖其の後、年を経るに従ひて、支那との關係、愈々親密なるに至り、終に其の開明の事情、互に相離るべからざるに至れり。故に、東洋史を研窮するに、支那を中心とすべきこと、讀者も既に了知せしならむ。

東洋史上古の中心

西洋史を學ぶべきこと

人族の盛衰

上古に在りては、東洋史の大勢を観るに、東部にては、支那に、大勢の中心存し、西部にては、印度に、開明の中心存せり。西部の中心は、高加索人種に屬し、東部は、蒙古人種に屬し、其性質、互に異なるが如し。雖其の後、互に關係相生じ、史乘の大勢より觀るときは、一團の發達をなすに至れり。尋いで、西部にては、西洋の上古史中の諸國と關係生ぜしこともありたれども、親密なるに至らず。又その國運、制度、文物等の發達を異にせり。故に東洋史と西洋史とは、別々に研窮するを便なりとす。されど、東洋史を研窮せしのみにては、未だ世界の趨勢を知るに能はざるゆゑ、東洋史と共に、必ず西洋史を研窮せざるべからず。顧みるに、蒙古人種の一族、漢族は、支那の中國を占領して、其の開化の中心となり、久しく其の主權を占めて、四圍の蠻夷と競争せり。後漢亡び、三國の世を経て、謂はゆる五胡十六國の世と

なり、又南北朝の世となりて、蠻夷、中國に割據して、多くの國を建つるに至れり。既にして隋これを一統して、唐に傳へ、宋に傳へ、唐宋は、共に漢族なりしが、次に遼、金等起り、終に蒙古の族、支那の主權を占め、元朝を建つ。是の時に當り、蒙古人の勢力は、遠く西域諸國より、歐州諸國に及び、印度もまた征服せられぬ。元朝衰へ、明朝は、また漢族を以て支那の主權を握りしが、其の末年に及び、西洋諸國は、印度より支那にまで來航して、通商を開き、漸く東西兩洋の關係親密なるに至れり。次に清朝は、滿州族より起りて、支那を一統せしが、西洋と諸種の關係を生じ、交通を開き、學術を交換し、世界の氣勢は、全く東西兩洋混一の形状となり、始めて世界史として記述するを得るに至りぬ。是れ蓋し學術の進歩と共に、世界氣運の一大變遷せるものと謂ふべし。既に史上にて、此の氣運の變遷を知了せし上は、退きては、自

東西洋の關係

世界氣運の大變遷

國の國勢を考察し、進みては、世界の氣勢を達觀せむことを勉むべし。故に、東洋史を研窮すと共に、西洋史をも研窮せむこと必要なれども、東洋史も、僅に此の一小冊子にて満足せず、益進みて、研窮の歩を進めむこと肝要なるべし。是れ著者が、此の書の終りに臨みて、特に一言を讀者に呈する所なり。

新撰東洋史 終

支那歷代帝都一覽表

國名	帝名	都名	今の地名
夏	相	商	河南 開封府
	大禹	安	山西 解州府
	帝	蒲	山西 永濟府
	帝	平	山西 平陽府
	帝	毫	河南 偃師府
	顓	帝	直隸 開州府
	少	曲	山東 兗州府
	黃	涿	直隸 保定府
	神	曲	山東 兗州府
	伏	陳	河南 陳州府
			或直隸 保定府

國名	帝名	都名	今の地名
殷(商)	成湯	亳	河南 開封府
	仲丁	囂	河南 開封府
	河	相	河南 開封府
	祖乙	邢	直隸 順德府
	盤庚	殷	河南 開封府
	武乙	朝	河南 開封府
	武王	鎬	河南 開封府
周	平王	洛	河南 開封府
秦	始皇	咸	陝西 西安府
前漢	高祖	長	陝西 西安府
新漢	王	同	同
後漢	光武	洛	河南 開封府
魏	文帝	洛	河南 開封府

元				
世祖	太祖	成祖	太祖	世祖
		帝由榔	惠帝	順帝
	太宗			
燕				
順	藩	順	應	
天				
順直	應盛	順直	江江	順直
天隸	天京	天隸	寧蘇	天隸
府省	府省	府省	府省	府省

明治三十一年三月十一日印刷
 同 三十一年三月三十日發行

新撰東洋史奧附
 定價金七拾錢

修文館編輯部編述



發行者

大草常



印刷者

野村宗十郎

印刷所

株式東京築地活版製造所

發行元

東京市日本橋區
 桶町壹丁目壹番地

松榮堂書店

●木村鷹太郎先生著 (增訂再版)

萬國史

●洋裝美本全壹冊
●正價金壹圓拾錢
●郵税金拾四錢

- 本書は教育的、活動的、精神的なり
- 全編氣力と精神とを有す
- 美術圖數十あり、以て雄大優美の情操を養ふ可し
- 地圖十數葉皆着色なり、從來のものに異にして沿革的なり
- 興味多方、話しあり、詩歌あり、論説あり
- 地名人名は時と處とに應ぜざる真正の名稱を用ゆ
- 近代史日本の部及び結論は實に一種の異彩あり
- 其他本書の特色一々贅とす江湖の士君子一讀して眞價の評定あらんことを懇願に堪えず敬白

●木村鷹太郎先生著 (增訂再版)

萬國史

- 洋裝美本全壹册
- 正價金壹圓拾錢
- 郵税金拾四錢

●本書は教育的、活動的、精神的なり

●全編氣力と精神とを有す

●美術圖數十あり、以て雄大優美の情操を養ふ可し

●地圖十數葉皆着色なり、從來のものゝ異にして沿革的なり

●興味多方、話しあり、詩歌あり、論説あり

●地名人名は時と處とに應ぜざる真正の名稱を用ゆ

●近代史日本の部及び結論は實に一種の異彩あり

●其他本書の特色一々贅せず江湖の士君子一讀して眞價の評定あらんことを懇願に堪えず敬白

●東京數學會編纂

新編算術教科書

●理學士大森千藏先生著

- 洋裝美本全二册
- 正價金 壹 圓
- 郵税金拾貳錢

新編動物學教科書

●理學士大森千藏先生纂譯

- 洋裝美本全壹册
- 正價金 八 拾 錢
- 郵税金 八 錢

實用動物

- 洋裝美本全壹册
- 正價金六拾五錢
- 郵税金 八 錢

●木村鷹太郎先生著

訂萬國史

●木村鷹太郎先生著

西洋小史

●修文館編述

新撰東洋史

●修文館編纂

新撰皇國史

●小林弘貞先生著

中等帝國史綱

●岡田辰次郎先生
●熊田子四郎先生
合著

中學日本歷史

●洋裝美本全壹冊

●正價金壹圓拾錢

●郵稅金拾四錢

●洋裝美本全壹冊

●正價金八拾錢

●郵稅金拾錢

●洋裝美本全一冊

●正價金七拾錢

●郵稅金拾錢

●和裝美本全二冊

●正價金六拾五錢

●郵稅金六錢

●和裝美本全二冊

●正價金六拾錢

●郵稅金六錢

●洋裝美本全貳冊

●正價金八拾錢

●郵稅金拾六錢

●文學士松本孝次郎先生講述

兒童心理學講義

●竹内楠三先生著

倫理學

●西脇又作先生謹述

中等日本修身學教育

●大田保一郎先生述

新撰教育學

●成富正義先生譯補

へるはるとし 主義教育學

●岡千仞先生校閱
●蒲生重章先生編纂
河野通之先生
下谷來治先生

中等漢文軌範教育

●洋裝美本全壹册

●正價金 六拾錢

●郵税金 八錢

●洋裝美本全壹册

●正價金 七拾錢

●郵税金 八錢

●假綴美本全壹册

●正價金 四拾錢

●郵税金 六錢

●洋裝美本全壹册

●正價金 三拾五錢

●郵税金 六錢

●洋裝美本全壹册

●正價金 五拾錢

●郵税金 八錢

●和裝美本全五册

●正價金 三拾五錢

●郵税金 四錢

●木元平太郎先生編

中等毛筆習字帖

●香川松石先生書

中學校用千字文

真書
行書
草書

●岡田辰次郎先生
●熊田宗之四郎先生
合著

中等教育支那歷史

訂正三版

●和裝美本全四册

●正價金四拾四錢

●郵税金六錢

●和裝美本各壹册

●正價金廿五錢

●郵税金四錢

●洋裝美本全壹册

●正價金七拾錢

●郵税金八錢

●理學士大森千藏先生編

日本新地誌

●總川猪之吉先生立案(專賣特許)

●洋裝美本全壹册

●正價金五拾錢

●郵税金拾貳錢

●美製大掛軸全壹幅

●正價金參圓

●送本通運便

新案黒地圖

●山田行元先生編製

●美製大掛軸全五幅

●正價金六圓

●送本通運便

大日本暗射新圖

●岡崎遠光先生著

日本小文典

●物集高見先生著

初學日本文典

●文學博士 元良勇次郎先生 閱
●日本主義主筆 竹內楠三先生 著

新心理學

近刻

●假綴美本全壹册

●正價金廿五錢

●郵税金四錢

●和裝美本全貳册

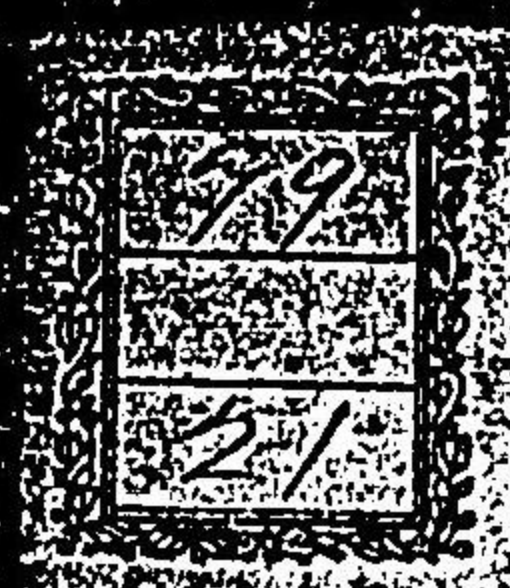
●正價金五拾五錢

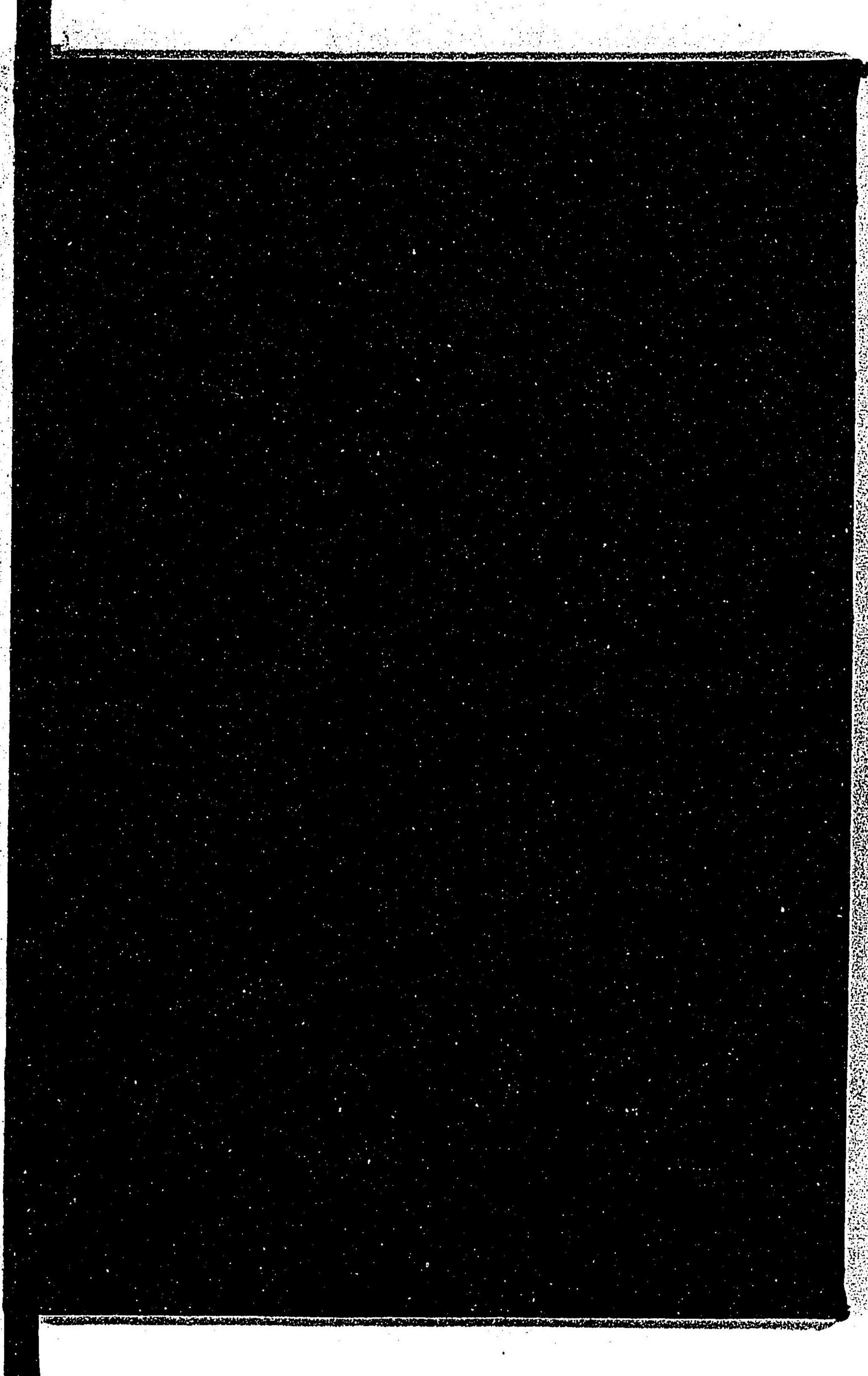
●郵税金六錢

●洋裝美本全壹册

●正價金壹圓廿錢

●郵税金拾四錢





79
21

(M)

003236-000-0

79-21

新撰東洋史

修文館/編

M3 1

ACC-1519



